

平成30年度

授業創造プラン

日野市立仲田小学校

1 方策の柱

基礎・基本の定着と学ぶ意欲の向上

- 授業の始め・終わりの時間の厳守や授業規律の確立
- 全ての児童が共に「学ぶ力」を高め、友達と協力して課題を解決する、主体的・協働的な学びを取り入れた学習活動の工夫
- 「東京ベーシック・ドリル」「なかだドリル」などを活用した基礎的・基本的な事項の徹底
- ガイドラインに基づく習熟度別指導による、算数科の習熟度に応じた指導・学習内容の工夫
- 4～6年生で実施する各学力調査の分析結果に基づく、授業改善プランの策定・実施
- UD化の環境・授業づくりを推進し、全ての子供が参加でき、命の大切さを実感しながら理解・習得・活用できる学力の育成

2 具体的な方策・取組

(1) 国語科の授業創造プラン

①「話し合う」「発表する」活動を重視する。

- ・伝え合うことの楽しさや必要性を感じられるように指導し、個→ペア・グループ→全体（スピーチ・発表会・ディベート・パネルディスカッションなど）へと話し合いの範囲を広げる。
- ・少人数の話し合いを多く取り入れることで、思いを伝えたり内容を聞き取ったりさせ、全体の前での話し方を定着することができるように、スピーチや発表の機会を多く取り入れていく。
- ・話し合い活動の場面では、自分の意見を書いてから話し合いを始めるなど、自分の考えをしっかりと持ち、話し合いにすすんで参加することができるように指導を徹底する。
- ・「話し合う」「発表する」活動は、国語科で系統的に学習するとともに、全教科・領域の学習活動の中で意識的に取り入れ、慣れさせる。
- ・日常的に自分の考えとその理由・根拠などを伝える活動を多く取り入れ、論理的な話し方を身に付けさせていく。
- ・役割演技や動作化、吹き出しへの書き込みなどで自我関与をさせ、興味をもって授業に参加することができたり、深く考えたりできるようにする。
- ・話し合いや発表の話型を示したり手本を見せたりすることで、多くの児童に活動の見通しをもたせる。
- ・市の「プレゼンテーション大会」などの機会を積極的に活用し、児童の表現力を伸ばしていく。
- ・日常的に話し合いの場面を取り入れ、話すことに自信をもたせていく。

②言葉の学習の充実を図る。

- ・教室に辞書を常備し、日常生活の中でも辞書を活用し、語感を育て、語彙を増やす。
- ・日常的に音読やスピーチ活動などに組み込み、話し方や聞き方についての力を育てる。
- ・文章の暗唱をしたり、漢字指導の中で熟語を使った短文を作ったりして語彙を豊かにする。
- ・漢字やカタカナは、ドリル、小テスト、プリントなどを活用し、繰り返しの練習を重ねる。また、児童全員が合格点を取るまで直させたり再テストをしたりしていく。
- ・言葉の意味調べ、教材で扱った言葉や新出漢字を使った短文作りをさせるなどして、言語についての興味・関心を高めるとともに、語彙や文法の理解を深めていく。
- ・新出漢字や初めてのひらがな・カタカナの学習では、毎日の家庭学習の中で、家庭と連携を取りながら繰り返し練習をして確実に身に付けさせるようにする。
- ・授業での言葉集めなどを通して、楽しく文字を用いることができるようにする。
- ・ローマ字の学習については、パソコンを積極的に活用することで、定着させていく。
- ・漢字の成り立ちや意味、似ている漢字や同じ部首をもつ漢字などを関連付けながら指導することで、興味をもたせていく。
- ・漢字検定を学校内で実施することにより、漢字学習への関心・意欲を高め、確実な習得を図る。

③読書の習慣を付け、読書量を増やす。

- ・読み聞かせ、本の紹介、ブックトークなどの読書指導を通して、本への興味を促し、すすんで読書をしたいという意欲と文章が読める力を育てていく。
- ・朝の「チャレンジタイム」に朝読書の時間を取り入れ、読書の習慣を身に付けさせる。
- ・様々なジャンルの本の紹介や読書貯金を行うことで、たくさんの本を読む環境をつくる。
- ・図書室を積極的に活用し、自分が興味をもっている分野だけでなく、普段手に取らないような本に触れさせる機会を意図的にもたせていく。
- ・春と秋に読書週間を設定し、読み聞かせや本の紹介、図書委員会による本の紹介・読書郵便などの

活動を行う。また、「親子読書」の取組を行い、家庭での読書の習慣を身に付けるための啓発を行う。

- ・PTAに協力を依頼し、朝の時間に保護者による読み聞かせを定期的に行い、本への関心を高める。

④「書く力」を高める。

- ・表現の仕方、順序を意識した文章の書き方を指導するとともに、視写、作文、日記などを取り入れ、経験したことや考えたことを文章に表していく。
- ・文章を書く機会を多く設け、短文から長文へ、作文の構成メモから作文に書かせるなど、段階的な指導を行う。
- ・書く力を高めるため、目的に応じて表やグラフなどの資料をもとに、自分の考えを書く活動を取り入れる。
- ・短文作りや授業で共通体験したことを文章に表す学習の機会を増やし、書くことに慣れさせる。
- ・作文指導では、必要に応じて事前に例文やヒントなどを掲示し、書く内容や順序を考えやすくし、見通しをもって取り組むことができるようにする。
- ・全教科・領域において、学習記録や感想を記述して、文章に表す機会をできるだけ多く設ける。
- ・日記を継続的に書く習慣を付けさせる。短い言葉でメモを書き、伝えたいことの中心が伝わるように整理して書かせる。

⑤「読む力」を高める。

- ・特に説明文において、児童の思考や理解の過程を構造化し、文章を読み取る力を付ける。
①一文ごとの理解 → ②形式段落ごとの理解 → ③意味段落ごとの理解 → ④全文を通しての理解 → ⑤自分の言葉で理解したことを表現する → ⑥理解したことを友達と交流して学習を深める
- ・物語文では、登場人物の様子や気持ち、場面の様子などを、動作化や役割演技・吹き出し作成・場面絵作成など、視覚化・言語化しながら楽しんで読むこと、読んだことをもとに音読の工夫や劇化などを取り入れることを通して読みを深めていく。
- ・文章の内容や図、表などから必要な情報を正確に選び出す学習の充実を図っていく。必要とされることを明確に言葉、簡単な文章にして考えるなど、問題解決の過程を細かく分けて指導していく。

⑥「聞く力」を高める。

- ・話を聞くときの態度、話の中心や要点をつかみながら聞く聞き方を指導していく。
- ・「聴写」を取り入れたたり、大事な言葉を反復して話させたりすることにより、聞く力を向上させる。
- ・「話す」学習と同時に、「聞く」学習が生まれることを伝え、話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べることなどを通して、考えをまとめさせる。
- ・話し手の方を向けさせたり、声の大きさを意識させたりし、話したことを相手が聞き取れているか再度確認するなどして、日頃から「人の話を聞く」意識を高めていく。

⑦主体的・対話的で深い学びを実現する。

- ・主体的に考えさせるために、考えたいと思わせるような発問になるように工夫する。
- ・答えが一つではない発問をし、友達と意見を交流させることで、対話的な学びの場を設定する。
- ・個人タイム→ペア・グループタイムの協働的な学習を取り入れる。
- ・一方的な発問ではなく、根拠や理由・他の表現を問うことにより児童の思考力を育てる。

「主体的な学び」の実現に向けて、子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること、子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活とのかかわりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。特に、

学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要である。

「対話的な学び」の実現に向けて、例えば、子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設けることなどが考えられる。

「深い学び」の実現に向けて、「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要であり、特に、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることなどが重要である。

⑧いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・協働的な学習により、一人一人の考え方が認められ、学びを豊かにする。
- ・作品を通して、登場人物のいのちの輝きを実感し、いのちあることの尊さを感じることができるようにする。
- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人とかかわりを深める授業
- ・2年生「うれしいことば」(人権感覚)
- ・3年生「よい聞き手になろう」(人権感覚)、「わたしと小鳥とすずと」(人権感覚)
- ・4年生「よりよい話し合いをしよう」(人権感覚)、「誰もがかかわり合えるように」(障害者)
- ・5年生「明日をつくるわたしたち」(人権感覚)
- ・6年生「未来がよりよくあるために」(人権感覚)

⑨みなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・ペア学習、トリオ学習を取り入れた協働的な学習を展開し、自己の考えを伝えるだけでなく、他者からの考えを受け取ることで、視野を広げるとともに、思考力・判断力を身に付けさせる。
- ・登場人物の心情や作者の伝えたいことについて、一人一人が自分の思いや考えをもち、皆で話し合うことを通して、様々な考え方の多様性に気付くとともに、多面的多角的に考えていくことの大切さを学ぶようにする。

⑩地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・国語の学習を通して身に付けた、話したり、聞いたり、書いたり、読み取ったりする力を活用して、地域の活動に参加し、より良い行動をするにはどうしたらよいか考え、実践していくことができる。

(2)算数科の授業創造プラン

①既習事項をしっかりと確認し、基礎・基本の定着、活用を図る。

- ・レディネステストなどで、単元ごとに必要な既習事項の定着を確認する。
- ・必要に応じて、学年を超え、つまずきの箇所まで立ち戻った学習を行う。
- ・既習事項を生かして、問題解決型学習を進められるようにする。

②ドリル学習や繰り返し学習により技能の習熟を図る。

- ・チャレンジタイムでドリルやプリントを使い、繰り返し練習させたり、家庭学習で復習させたり

する。

- ・計算などの繰り返し学習により、効率よく演算ができるようにさせる。
- ・計算手順を確実に定着させるために視覚的な効果のあるフラッシュカードやワークシートを活用する。

③数学的な考え方を育てる「学び合い」の学習を重視する。

- ・言語活動を多く取り入れ、自分の考えを言葉で表現させる。
- ・ブロックなどの具体物を使った操作で、問題文のイメージをもたせる。
- ・絵や図に表して、問題文のイメージをもたせる。
- ・児童の考えをもとに学習を展開していけるよう、課題提示や発問を工夫する。
- ・友達の考え方を聞き、様々な解決方法や表現方法・考え方があることに気付かせる。

④表現力・思考力を育てる学習を重視する。

- ・板書の工夫と連動したノート指導を大切にする。
- ・式を活用する課程では、言葉から式、式から言葉で表す活動を大切にする。
- ・自分の考えや友達の考えをノートに書き留め、一つの課題について多様な考え方ができるようにする。

⑤ICT・具体物を用いた算数的活動を多く取り入れる。

- ・インタラクティブスタディなどのコンピュータソフトを活用し、ドリル的な反復学習を行う。
- ・日常の事象と教材を結び付けることで、算数的活動の楽しさや数学的な処理の良さに気付けるようにする。
- ・具体的の代わりとなる絵・写真・図表などをパソコンとプロジェクターを使って拡大投影して授業への関心を高め、理解を高める。

⑥作業的・体験的な算数的活動を取り入れる。

- ・おはじきを並べる・実物を使う・物をつくる・実物を測るなど、実際に作業したり体験したりすることにより、理解を容易にしたり深めたりする。
- ・日常生活で経験することを学習の中で想起させたり、生活の中でも算数的活動を取り入れたりする。
(例「時刻と時間」「長さ」)

⑦一人一人の習熟度に応じた細かな指導、個別指導を充実させる。

- ・学力向上支援員の活用やリソースルームティーチャーとの連携を大切にし、個に応じた指導を充実させる。
- ・計算練習では、スモールステップを取り入れたプリントなどを活用する。
- ・学習後、ノートの点検などを行い、一人一人の理解度をチェックして、次時の指導に生かす。
- ・発展的学習などを希望する児童が意欲的に取り組めるよう、ICTを活用する。

⑧東京ベーシック・ドリル、なかだドリルを活用する。

- ・習熟度別指導が効果的に行われるよう、3年生以上で東京ベーシック・ドリル、なかだドリルを取り入れる。1学期末までに前学年の内容の「診断シート」を実施させ、個別指導が必要な児童には、夏季休業中の補習講座で補充の学習を行う。
- ・各単元では教科書での学習の後、「練習シート」を活用して、学習内容の定着の確認をする。

⑨ガイドラインに基づく、習熟度別学習を充実する。

- ・3年生以上は、習熟度別担当教諭も含めて、2学級を習熟度別に「補充コース」・「基本コース」・「発展コース」の3クラスに分け、児童の理解や習熟の程度に応じた学習集団を編成する。
- ・児童の理解や習熟の程度などの状況を把握するために、単元に入る前に実施するレディネステストや過去の調査結果などをもとに、考えられるつまずきに応じて、どの段階に立ち戻って知識・理解や技能の学び直しをする必要があるのかを把握し、反復学習などによる補充的な指導を取り入れる。
- ・「補充コース」では、具体的な学習到達度を設定し、その達成に向けた段階的・系統的な指導を行う。

ユニバーサルデザイン化を図り、「学習の速度に応じた課題や教材・教具などの工夫」「つまずきに応じたきめ細かな段階的指導」などを取り入れていく。具体的には、「刺激量の調整」「場の構造化」「時間の構造化」「スモールステップ化」「視覚化」「共有化」などの工夫をする。

- ・「発展コース」では、学習内容の理解を一層深めたり広げたりする指導や、更にすすんだ学習内容の指導を実施する。一方的に教師が知識を伝えるだけでなく、児童が自主的に学習活動を行える問題解決型学習を取り入れる。

⑩主体的・対話的で深い学びを実現する。

- ・問題提示の工夫により、主体的に考えさせる。
数値や場面を隠す・日常の事象を取り上げる・決まりを見付けさせる・誤答を生かす・くじ引きで分ける(ある事象をくじ引きによって分ける)など。
- ・個人タイム→グループタイム の協働的な学習を取り入れる。
- ・一方的な発問ではなく、根拠や理由・他の表現を問うことにより児童の思考力を育てる。

【**主体的な学び**】児童生徒自らが、問題の解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、問題解決の過程を振り返り、よりよく解決したり、新たな問いを見い出したりするなどの「主体的な学び」を実現することが求められる。

【**対話的な学び**】事象を数学的な表現を用いて論理的に説明したり、よりよい考えや事柄の本質について話し合い、よりよい考えに高めたり事柄の本質を明らかにしたりするなどの「対話的な学び」を実現することが求められる。

【**深い学び**】数学に関わる事象や、日常生活や社会に関わる事象について、「数学的な見方・考え方」を働かせ、数学的活動を通して、新しい概念を形成したり、よりよい方法を見い出したりするなど、新たな知識・技能を身に付けてそれらを統合し、思考、態度が変容する「深い学び」を実現することが求められる。

⑪いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人とのかかわりを深める授業
- ・「わかった、できた」という実感を大切に授業

⑫みなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・話し合い学習(ペア学習、グループ学習)を意図的、計画的に取り入れた授業
- ・様々な問題に対し、一人一人が自分の考えをもち、発表し合い、よりよい解決方法を皆で考えていく授業を実践する。

⑬地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・地域に出て、感じ、考えた課題を数学的な考えを活用して解決していこうとする児童を育てる。

(3)社会科の授業創造プラン

①体験を生かした学習を取り入れる。

- ・地域探検や農家、スーパーマーケット、自動車工場、クリーンセンター、水再生センターなどの身近な施設を見学し、生活と関連させて意欲を高める。
- ・出前授業の活用やゲストティーチャーを招聘し、専門家から話を聞き、理解を深める。
- ・地域教材を活用したり、フィールドワークを取り入れたりして、生活科から社会科への移行をスムーズに行う。

- ・見学をするときの視点を明確にし、記録のとり方について具体的に指導する。
- ・社会的事象への関心をより高めるために、学習している内容が自分の生活とどの程度、密接にかかわっているかを実感させるような体験的活動を取り入れる。
- ・授業の中でニュースや時事、外国での出来事などに触れ、児童に興味・関心をもたせる。

②資料活用の技能(社会)を育てる。

- ・算数科「表とグラフ」の学習内容を活用するなど、他教科との関連を図り、理解を深める。
- ・教科書や資料集に掲載されている資料を読み取る活動を定期的に取り入れる。
- ・課題を解決するためには、資料から多くの情報を得ることができ、さらに思考を広げていくことができることを実感させる。
- ・資料を活用して新聞にまとめる。調べた内容を精査する中での気づき、資料を比較した内容、感想などを取り入れるようにさせる。
- ・習得した資料活用の技能を「総合的な学習の時間」の探求活動に生かすことにより、スパイラルに力を高めるようにする。
- ・資料を活用し、適切に表現させるために、資料の提示の仕方を工夫したり、協働的な学習を効果的に取り入れたりする。

③主体的・対話的で深い学びを実現する。

- ・「なぜだろう」と思わせるような導入から学習課題をつくっていくことで、解決したいという気持ちを高め、主体的・対話的に学ぶ授業展開をしていく。

「**主体的な学び**」については、児童生徒が学習課題を把握しその解決への見通しをもつことが必要である。そのためには、単元などを通した学習過程の中で動機付けや方向付けを重視するとともに、学習内容・活動に応じた振り返りの場面を設定し、児童生徒の表現を促すようにすることなどが重要である。

「**対話的な学び**」については、例えば、実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりする活動の一層の充実が期待される。しかしながら、話し合いの指導が十分に行われずグループによる活動が優先し内容が深まらないといった課題が指摘されるところであり、深い学びとのかかわりに留意し、その改善を図ることが求められる。

「**深い学び**」の実現のためには、「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や、説明、議論などの学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である。具体的には、教科・科目及び分野の特質に根ざした追究の視点と、それを生かした課題（問い）の設定、諸資料などを基にした多面的・多角的な考察、社会に見られる課題の解決に向けた広い視野からの構想（選択・判断）、論理的な説明、合意形成や社会参画を視野に入れながらの議論などを通し、主として用語・語句などを含めた個別の事実などに関する知識のみならず、主として社会的事象などの特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念などに関わる知識を獲得するように学習を設計することが求められる。

④いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人とのかかわりを深める授業
- ・6年生「暮らしの中の政治」(アイヌの人々)(HIV感染者)
- ・人々が文化を大切にし、伝承していこうとする取組について学習する。

⑤みなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・社会的な課題について、一人一人が自分の考えをもち、みんなで話し合うことを通して、より良い知恵を創造していく学習をする。

⑥地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・社会科見学や校外学習などで感じたことや考えたこと、疑問に思ったことを地域の人や専門家の人に尋ねたり、ともに共感し合ったりする活動を通して、地域の一員としての自覚を養うとともに、社会に貢献していこうとする意欲を育む。

(4)理科の授業創造プラン

①体験を生かした学習を取り入れる。

- ・地域教材を活用したり、フィールドワークを取り入れたりして、生活科から理科への移行をスムーズに行う。
- ・見学をするときの視点を明確にし、記録のとり方について具体的に指導する。
- ・科学的事象への関心をより高めるために、学習している内容が自分の生活とどの程度、密接にかかわっているかを実感させるような体験的活動を取り入れる。
- ・日頃から地図や方位、月や太陽の動きなどに興味関心をもたせ、児童に対する問いかけの機会を増やす。
- ・授業の中でニュースや身の回りの出来事などに触れ、児童に興味・関心をもたせる。

②科学的なものの見方・思考(理科)を育てる。

- ・問題解決型学習を中心に「はっきりさせたいこと」を明確にし、学習課題から予想を立て、学習課題をはっきりさせ、実験や観察などの計画を主体的に立てられるようにする。
- ・疑問を見付ける習慣を身に付けさせ、疑問を解決する手段として、実験・観察を中心とした活動を重視する。
- ・実験や観察に使う器具の正しい使い方について、中学年の段階から指導する。また、教師が師範を示すことで、技能の定着を図る。
- ・高学年の実験单元では、「問題」→「予想」→「実験」→「結果」→「考察」の流れを定着させ、事象を正しく見取る力、根拠を説明できる力を伸ばす。
- ・結果を予想する活動を重視し、個々の発想と科学的な見方や考え方を育てる。
- ・観察や実験、見学などで分かったことを言葉や図・グラフを用いて、観察カードやノート、新聞やパンフレットに分かりやすくまとめる活動を重視していく。
- ・問題解決の過程で、実験結果や表から分かったことを文章でノートに書き表す活動を通して、考察する力を身に付けていく。
- ・実験後の考察を大切にし、友達との話し合いなどで考えを交流する時間を設定し、様々な考え方や見方ができるように指導していく。
- ・ICTを活用し、学習資料を充実・補完し、児童の関心・意欲を高めるとともに、知識・理解の確実な習得を図る。

③主体的・対話的で深い学びを実現する。

- ・問題作成→予想(見通し)→観察・実験(課題解決)→考察→結論(まとめ)→発展・適用(振り返り)の流れを学習過程に取り入れる。
- ・「なぜだろう」と思わせるような導入から学習課題をつくっていくことで、解決したいという気持ちを高め、主体的・対話的に学ぶ授業展開をしていく。

「主体的な学び」を実現していくためには、例えば、a) 自然の事物・現象から問題を見い出し、見通しをもって課題や仮説の設定や観察・実験の計画を立案したりする学習場面を設けることや、b) 観察・実験の結果を分析・解釈して仮説の妥当性を検討したり、全体を振り返って改善策を考えたりする学

習場面を設けること、c) 得られた知識や技能を基に、次の課題を発見したり、新たな視点で自然の事物・現象を把握したりする学習場面を設けることなどが考えられる。

「対話的な学び」を実現していくためには、例えば、課題の設定や検証計画の立案、観察・実験の結果の処理、考察・推論する場面などでは、あらかじめ個人で考え、その後、意見交換したり、議論したりして、自分の考えをより妥当なものにする学習場面を設けることなどが考えられる。

「深い学び」を実現していくには、自然の事物・現象について、「理科の見方・考え方」を働かせて、探究の過程を通して学ぶことにより、資質・能力を獲得するとともに、「見方・考え方」も豊かで確かなものとなると考えられる。さらに、次の学習や日常生活などにおける問題発見・解決の場面において、獲得した資質・能力に支えられた「見方・考え方」を働かせることによって「深い学び」につながっていくものと考えられる。

④いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人とのかかわりを深める授業
- ・3年生「植物を育てよう」「昆虫を育てよう」
- ・4年生「季節と生き物」
- ・5年生「植物の発芽」「植物の成長」「メダカの誕生」「人の誕生」
- ・6年生「体のつくりとはたらき」「生物どうしのかかわり」「生物と地球環境」

⑤みなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・問題解決学習において、自分の考えをもち、話し合う活動を通して、実験方法や調査方法を考えたり、その結果を基に考察をしたりし、学習を深めていく。

⑥地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・地域の中での学習を、専門家や地域のボランティアの方々と連携して行い、様々な人達と交流することを通して、問題解決をしていく学習に取り組む。

(5)生活科の授業創造プラン

①児童の身近な生活圏を活動や体験の場や対象にする。

児童が身近な生活圏において、本来一体となっている人、社会、自然とかかわりながら、自らの興味・関心を発揮して具体的な活動や体験を行う。

②児童が身近な人や社会、自然と直接かかわる活動を重視する。

かかわりを通して対象を認識することを重視し、直接体験を欠かさないようにする。

③児童の思いや願いをはぐくみ、意欲や主体性を高める学習過程にする。

児童の興味・関心を踏まえ、適切な出会いの場を用意するとともに、その思いや願いがさらに膨らむような学習過程を展開していく。

④働きかける対象についての気づきとともに、自分自身に気付くことができるようにする。

具体的な活動や体験を通して、かかわる対象への気づき生まれることを大切にするとともに、一人一人が以前の自分より向上し、成長したことに気付くことを大切にしていく。

⑤児童の姿を丁寧に見取り、働きかけ、活動の充実につなげていく。

児童が感じ取った事柄を、教師が尋ね返したり問いかけたり共感したりするなどの言葉かけや働きかけをして、児童の発言やしぐさの背景を深く理解するようにする。それを言葉に出して意思の疎通を図ったり、児童の思いに共感したりしていくことを大切にする。

⑥主体的・対話的で深い学びを実現する。

「主体的な学び」

子供の生活圏である学校、家庭、地域を学習の対象や場とし、対象と直接関わる活動を行うことで、興味や関心を喚起し、自発的な取組を促してきた。こうした点に加えて、表現を行い伝え合う活動の充実を図ることが必要である。小学校低学年は、自らの学びを直接的に振り返ることは難しく、相手意識や目的意識に支えられた表現活動を行う中で、自らの学習活動を振り返る。振り返ることで自分自身の成長や変容について考え、自分自身についてのイメージを深め、自分のよさや可能性に気付いていく。自分自身への気付きや、自分自身の成長に気付くことが、自分は更に成長していけるという期待や意欲を高めることにつながる。学習活動の成果や過程を表現し、振り返ることで得られた手応えや自信は、自らの学びを新たな活動に生かし挑戦していこうとする子供の姿を生み出す。こうしたサイクルが「学びに向かう力」を育成するものとして期待することができる。

「対話的な学び」

身の回りの様々な人々とかかわりながら活動に取り組むことや、伝え合ったり交流したりすることが大切である。伝え合い交流する中で、一人一人の発見が共有され、そのことをきっかけとして新たな気付きが生まれたり、関係が明らかになったりすることが考えられる。他者との協働や伝え合い交流する活動は、一人一人の子供の学びを質的に高めることにもつながる。また、双方向性のある活動が行われ、対象と直接かかわり、対象とのやり取りをする中で、感じ、考え、気付くなどして、「対話的な学び」が豊かに展開されることが求められる。

「深い学び」

思いや願いを実現していく過程で、一人一人の子供が自分とのかかわりで対象を捉えていくことが生活科の特質であると言える。「身近な生活に関わる見方・考え方」を生かした学習活動が充実することで、気付いたことを基に考え、新たな気付きを生み出し、関係的な気付きを獲得するなどの「深い学び」を実現することが求められる。低学年らしいみずみずしい感性により感じ取られたことを、自分自身の実感の伴った言葉にして表したり、様々な事象と関連付けて捉えようとしたりすることを助けるような教員のかかわりが求められる。

⑦いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人とかかわりを深める授業
- ・1年生「がっこうだいすき、ともだちだいすき」(人権感覚)、「わたしのあさがお」
「いきものだいすき」、「ありがとうがいっぱい」
- ・2年生「種まき・苗植え」、「生き物さがし」、「生き物の世話」、「すくすくぐんぐん」(人権感覚)
「ちてさいころのこと」、「じぶんものがたり」

⑧みなに参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・みんなで集団生活をしながら見出した課題を、一人一人が考え、皆で話し合うことを通して、より良い知恵に高めていく学習に取り組む。

⑨地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・地域の人たちとの交流を大事にし、その中から気付いたことや感じたこと、考えたことを大事に、自分がどう行動したらよいのか考えを深め、実践していけるようにする。
- ・1, 2年生「生活科見学」(どんぐり拾い)
- ・2年生「菊づくり」

(6)音楽科の授業創造プラン

- ①音楽科については、その課題を踏まえ、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむことを重視する。
- ②音楽に関する用語や記号を音楽活動と関連付けながら理解することなど、表現と鑑賞の活動の支えとなる指導を行い、音や音楽を近くし、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視する。
- ③音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、創作活動「音楽づくり」を行う。また、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるように鑑賞活動を行い、根拠をもって自分なりに批評することのできるような力の育成を図っていく。
- ④国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基本として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに、他国の音楽文化を尊重する態度などを養う観点から、学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする。

⑤主体的・対話的で深い学びを実現する。

「主体的な学び」の実現のためには、音楽によって喚起されるイメージや感情を自覚させることが重要である。このことが、イメージや感情を喚起させる要因となった音楽的な特徴を探ったり、芸術としての音楽の文化的・歴史的背景とのかかわりを考えたりすることの原動力となり、表したい音楽表現や音楽のよさや美しさなどを見い出すことに関する見通しをもつことにつながる。また、音楽表現を創意工夫して音楽で表現したり音楽のよさや美しさを味わって聴いたりする過程でもったイメージや感情の動きを振り返り、音や音楽が自分の感情及び人間の感情にどのような影響を及ぼしたのかを考えることが、学んでいること、学んだことの意味や価値を自覚するとともに、音や音楽を生活や社会に生かそうとする態度を育成することとなる。このことが次の学びにつながっていく。

「対話的な学び」の実現のためには、一人一人が「音楽的な見方・考え方」を働かせて、音楽表現をしたり音楽を聴いたりする過程において、互いに気付いたことや感じたことなどについて言葉や音楽で伝え合い、音楽的な特徴について共有したり、感じ取ったことに共感したりする活動が重要である。客観的な根拠を基に他者と交流し、自分なりの考えをもったり音楽に対する価値意識を更新したり広げたりしていく過程に学習としての意味がある。

「深い学び」の実現のためには、児童が音や音楽と出合う場面を大切にし、一人一人が「音楽的な見方・考え方」を働かせて、音楽と主体的にかかわることができるようにすることが重要である。その際、知覚・感受したことを言葉や体の動きなどで表したり比較したり関連付けたりしながら、要素の働きや音楽の特徴について他者と共有・共感したりする活動を適切に位置付ける。このことが、曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景とのかかわり及び表現方法、音楽様式、伝承方法の多様性などの音楽文化について理解することや、どのように音楽で表すかについて表現意図をもつこと、また楽曲の特徴や演奏のよさや美しさ、自分や社会にとっての音楽の意味や価値は何かなどの価値判断をすることに関する思考・判断を促し、深めることにつながる。

⑥いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人とかかわりを深める授業
- ・音楽を通して、文化の伝承の喜びと尊さを感じ、これからも音楽を通して、いのちの輝きを感じることができるようにする。

⑦みなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・合奏や合唱の活動を通して、皆で音楽を作り上げることの素晴らしさを実感する授業を行う。

⑧地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・音楽の授業で学習した成果を、身近な人達に披露する機会をもつとともに、自分たちができる活動について考えようとする事ができる。

(7)図画工作科の授業創造プラン

- ①図画工作科については、その課題を踏まえ、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する。
- ②創造性をはぐくむ造形体験の充実を図りながら、形や色などによるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かにかかわる態度をはぐくみ、生活を美しく豊かにする造形の働きを実感させるような指導を重視する。
- ③よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取る力や思考する力を一層豊かに育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりするなど、鑑賞の指導を重視する。
- ④暮らしの中の造形や我が国や諸外国の親しみのある表現などに関する学習では、作品などのよさや美しさを主体的に味わったり感じたりすることを重視する。

⑤主体的・対話的で深い学びを実現する。

題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにする。その際、造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図る。

「主体的な学び」の視点

- ・これまでの経験を生かすことのできる学習の充実を図る。
- ・自分の活動を確かめたり振り返ったりするような場面を設定し、造形的な創造活動における自分の成長やよさ、可能性などに気づき、次の学習につなげられるようにする。

「対話的な学び」視点

- ・一人で材料や場所、作品と向き合うなどの自分との対話を大切にしつつ、児童が自分の「見方・考え方」を働かせて、表したいことや用途、材料や場所の特徴、表し方などについて、お互いの活動や作品を見合いながら考えたことを伝え合ったり、感じたことや思ったことを話したりするなどの言語活動を一層充実する。
- ・教員との対話、児童相互の対話だけではなく、保護者や地域、社会の人と交流する機会を設定する。

「深い学び」の視点

- ・造形的な創造活動において、つくりたいことや表したいこと、見たいことなど、児童が自ら課題を見付けることを重視している学習であることを踏まえる。
- ・育成する資質・能力を明確にし、それらの資質・能力を相互に関連して働かせることができる活動を設定する。
- ・児童が自ら学びを深めていくことができるように、「つくり、つくりかえ、つくる」という学習過程を重視する。
- ・児童自身が学びの実感をもつことができるように、教員が教える場面と児童が「見方・考え方」を働かせて友達と共に学び合う場面との関連を考え、授業設定をする。

⑥いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・「全てのものには命がある。」という気持ちを忘れずに、道具や材料、また出来上がった作品など大切にできる心を育てていく。

⑦みなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

・共同制作やグループ活動、制作の準備や片付けの中で協力し合う。

⑧地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

・『消防写真会』、『ごみゼロ大作戦！ごみ減量ポスター』、『緑と清流ポスター』、『明るい選挙啓発ポスター』など、日野市内で取り組んでいるポスターコンクールなどに参加して、地域の中の活動にかかわりを持ちながら意識を高めていく。

(8)家庭科の授業創造プラン

①生活を工夫する楽しさやものをつくる喜び、家族の一員としての自覚をもった生活を実感するなど、実践的・体験的な学習活動、問題解決的な学習を通して、自分の成長を理解し家庭生活を大切にする心情をはぐくむとともに、生活を支える基礎的・基本的な能力と実践的な態度を育成することを重視する。

②家族の一員として成長する自分を自覚し、家庭生活を大切にする心情をはぐくむことを目指した学習活動を一層充実する。

③食事の役割や栄養を考えた食事のとり方、調理などの学習活動を一層重視するとともに、身の回りの生活における金銭の使い方や物の選び方、環境に配慮した物の活用などの学習について、実践的な学習活動を更に充実させる。

④家庭生活を総合的にとらえる視点から、家族の生活と関連させながら衣食住などの内容を取り扱うことを一層重視する。また、小学校第4学年までの学習を踏まえた2学年間の学習ガイダンス的な内容を設定するとともに、他教科などとの関連を明確にし、連携を図る。

⑤主体的・対話的で深い学びを実現する。

「主体的な学び」とは、現在及び生涯を見通した生活の課題について、解決の見通しをもち、課題の発見や解決に取り組むとともに、学習の過程を振り返って、次の学習に主体的に取り組む態度を育む学びである。そのため、学習した内容を実際の生活で生かす場面を設定し、自分の生活が家庭や地域社会と深くかかわっていることを認識したり、自分が社会に参画し貢献できる存在であることに気付いたりする活動に取り組むことなどが考えられる。

「対話的な学び」とは、他者との会話を通して考えを明確にしたり、他者と意見を共有して互いの考えを深めたり、他者と協働したりするなど、自らの考えを広げ深める学びである。なお、技術・家庭科技術分野では、例えば、直接、他者との対話を伴わなくとも、既製品の分解などの活動を通してその技術の開発者が設計に込めた意図を読み取るといったことなども、自らの考えを広げ深める学びとなる。

「深い学び」とは、児童生徒が、生活の中から問題を見い出して課題を設定し、その解決に向けた解決策の検討、計画、実践、評価、改善といった一連の学習活動の中で、「生活の営みに係る見方・考え方」や「技術の見方・考え方」を働かせながら課題の解決に向けて自分の考えを構想したり、表現したりして、資質・能力を獲得する学びである。このような学びを通して、生活や技術に関する事実に基づく知識が概念的知識として質的に高まったり、技能の習熟・熟達（定着）が図られたりする。また、このような学びの中で「対話的な学び」や「主体的な学び」を充実させることによって、家庭科、技術・家庭科が目指す思考力・判断力・表現力も豊かなものとなり、生活や技術についての課題を解決する力や、生活や技術を工夫し創造しようとする態度も育まれると考えられる。

⑥いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

・食育の活動を通して、健康を維持し、いのちを伝えていくためには、食事が大切であることを学習する。

・一人一人がよりよく生き、いのちをつないでいくために、衣食住について望ましい考えをもつことができる。

- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人とかかわりを深める授業

⑦みなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・バランスのとれた食事や規則正しい生活習慣を目指し、皆で話し合うことを通して、自分をよりよく生かしていこうとする意欲をもつことができる。

⑧地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・地域の活動に、家庭科で学習した知識や技能を生かし、地域の中で役立とうとする意欲をもつことができる。

(9)体育科の授業創造プラン

- ①運動領域については、幼児教育との円滑な接続を図ること、体力の低下傾向が深刻な問題となっていることや積極的に運動する児童とそうでない児童の二極化への指摘があること、各学年の系統性を図ることなどを踏まえて指導する。
- ②生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培う観点から、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて指導することができるようにするとともに、低学年、中学年、高学年において、児童に身に付けさせたい具体的な内容を明確にする。その際、指導内容の確実な定着を図ることができるよう、運動の取り上げ方を一層弾力化し、低学年、中学年及び高学年に示されている「体づくり運動」以外の全ての指導内容について、2学年のいずれかの学年で取り上げ指導することもできるようにする。
- ③「体づくり運動」については、一層の充実が必要であることから、全ての学年において発達の段階に応じた指導内容を取り上げ指導する。学習したことを家庭などで生かすことができるよう指導の在り方を改善する。また、「体づくり運動」以外の領域においても、学習した結果としてより一層の体力の向上を図ることができるよう指導の在り方を改善する。
- ④保健領域については、身近な生活における健康・安全に関する基礎的な内容を重視するという観点から、指導内容を改善する。その際、けがの防止としての生活の安全に関する内容について取り上げ、体の発育・発達については、発達の段階を踏まえて指導の在り方を改善する。また、健康な生活を送る資質や能力の基礎を培う観点から、中学校の内容につながる系統性のある指導ができるよう健康に関する内容を明確にし、指導の在り方を改善する。低学年は、運動領域との関係を踏まえ、健康と運動のかかわりなど、運動領域の運動を通して健康の認識がもてるよう指導の在り方を改善する。

⑤主体的・対話的で深い学びを実現する。

「**主体的な学び**」は、運動の楽しさや健康の意義などを発見し、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み、それを考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりする学びの過程と捉えられる。各種の運動の特性や魅力に触れたり、自他の健康の保持増進や回復を目指したりするための主体的な学習を重視するものである。

「**対話的な学び**」は、運動や健康についての課題の解決に向けて、児童生徒が他者（書物などを含む）との対話を通して、自己の思考を広げ深めていく学びの過程と捉えられる。自他の運動や健康についての課題の解決を目指して、協働的な学習を重視するものである。

「**深い学び**」は、自他の運動や健康についての課題を発見し、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決する学びの過程と捉えられる。児童の発達の段階に応じて、これらの深い学びの過程を繰り返すことにより、体育科の「見方・考え方」を豊かで確かなものとすることを重視するものである。

⑥いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・自己の体力や体について知ること、自己への理解を深めるとともに他者に対しての理解も深めるとともに、人が尊い命によって生きているものということを実感させる機会を保障する。
- ・保健領域の中で心と体のつながりについて学ぶ際には、心の変化が心身に影響することを十分理解させ、その時の対処法についても考える機会をもつようにする。また、悩みがある時には、周りの人や友達へ頼っていいという雰囲気を学級の中でも作ることができるようにする。

⑦みなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・児童全員が運動の特性としての楽しさや喜びを味わいながら、自らの成長を実感できる授業作りを行うことが重要である。課題解決を図る際にペア学習やグループ学習といった対話的な学習に取り組み、互いに考えを出し合うことで、より質の高い運動を行うことができるような授業を目指していく。また、技能のポイントとしての知識だけでなく、スモールステップの段階を作ることで児童に達成感を味わわせ、より運動に対して積極的に参加するような授業を目指す。

⑧地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・学校内で行った成果を地域行事（陸上競技大会、ロードレース大会、水泳大会、ロープジャンプ大会）の中で発揮することで、学校だけではない地域とのかかわりを行いながら児童の力の高まりを目指す。
- ・生涯スポーツという観点についても考えさせ、運動に対して「する・見る・支える・知る」といった部分の中でも感じる機会を保障することで、スポーツについて身近なものと考えることができるようにする。

(10) 特別の教科 道徳の授業創造プラン

道徳の時間に生かす指導方法には多様なものがある。ねらいを効果的に達成するには、児童の感性や知的な興味などに訴え、児童が問題意識をもち、意欲的に考え、主体的に話し合うことができるように、ねらい、児童の実態、資料や学習指導過程などに応じて、最も適切な指導方法を選択し、工夫して生かすことが必要である。そのためには、教師自らが多様な指導方法を理解し、身に付けておくとともに、指導に際しては、児童による学習がより効果的に生み出されるように、児童の発達の段階などをとらえ、指導方法を吟味した上で生かすことが重要である。

① 資料を提示する工夫

資料提示の方法としては、教師による読み聞かせが一般に行われている。その際、例えば、紙芝居のように提示したり、影絵、人形やペープサートなどを生かして、劇のように提示したり、音声や音楽の効果を生かしたりする工夫などが考えられる。そのことが、特に低学年などでは理解の手助けとなる。また、ビデオなどの映像も、提示する内容を事前に吟味した上で生かすことによって効果が高められる。なお、多くの情報を提示することが必ずしも効果的だとは言えず、選り抜かれた情報の提示が想像をふくらませる上で効果的な場合もあることに留意する。

② 発問の工夫

教師による発問は、児童の思考や話し合いを深める重要な鍵になる。発問によって児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。そのためにも、児童の意識の流れを予想し、それに沿った発問や、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問などを心掛けることが大切である。その際、授業での発問は重要なものに絞られていくことになる。

発問を構成する場合には、授業のねらいに強くかかわる中心的な発問をまず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的にとらえるようにするという手順が有効な場合が多い。その

中で、児童が自ら問いを発したり、学級に問題を提起したりするようなこともあってよい。

③ 話合いの工夫

話合いは、児童相互の考えを深める中心的な学習活動であり、道徳の時間においても重要な役割を果たす。意見を出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じて効果的に話合いが行われるように工夫する。座席の配置を工夫したり、討議形式で進めたり、グループやペアによる話合いを取り入れたりするなどの工夫も行う。また、名札の活用、同じ考えをもつ児童同士が集まるように座席の移動を行うことなどによる一人一人の立場を明確にした話合いも効果的である。その際、教師が話合いの全体を調整したり、それを進行したりする役割も重要であるが、児童の話合いの能力の高まりとともに、児童相互に聞き合い、討論することができるように工夫することが大切である。

④ 書く活動の工夫

書く活動は、児童が自ら考えを深めたり、整理したりする機会として、重要な役割をもつ。この活動においては、必要な時間を確保することで、児童は自分なりの取り組み方でじっくりと考えることができる。また、学習の中で個別化を図り、児童の感じ方や考え方をとらえ、個別指導を進める重要な機会にもなる。さらに、一冊に綴じられたノートなどを活用することによって、児童の学習を継続的に深めていくことができ、心の成長の記録として活用することもできる。

⑤ 表現活動の工夫

児童が表現する活動の方法としては、発表したり書いたりすることのほかに、児童に特定の役割を与えて即興的に演技する工夫、動きやせりふの真似をして理解を深める工夫、音楽、動作、表情などで自分の考えを表現する工夫などがあげられる。低学年では、児童が人形やペープサートなどを手に持って演ずることも効果的である。さらに、実際の場面の追体験、実験や観察、調査などによる表現物を伴った学習活動も実感的な理解につながり、効果的である。

⑥ 板書を生かす工夫

道徳の時間は黒板を生かして行うことが多く、板書は児童にとって思考を深める重要な手掛かりとなる。板書は教師の伝えたい内容を示したり、その順序や構造を示したり、内容の補足や補強をしたりするなど、多様な機能をもっている。その機能を生かすために重要なことは、思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく、違いや多様さを対比的、構造的に示す工夫、中心部分を浮き立たせる工夫などを凝らすことである。特に低学年においては、黒板を劇の舞台のようにして生かすことなども考えられる。また、教師が児童の考えを取り入れ、児童と共につくっていくような創造的な板書となるように心掛けることも大切である。

⑦ 説話の工夫

説話とは、教師の体験や願い、あることについての感じ方や考え方などを語ったり、日常の生活問題、新聞、雑誌、テレビなどで取り上げられた問題などを盛り込んで話したりすることによって、ねらいの根底にある道徳的価値を児童が一層主体的に考えられるようにしようとするものである。教師が意図をもってまとめた話をするのは、児童が思考を一層深めたり、考えを整理したりするのに効果的である。教師が自らを語るによって児童との信頼関係が増すとともに、教師の人間性がにじみ出る説話は、児童の心情に訴え、深い感銘を与えることができる。

⑧ 主体的・対話的で深い学びを実現する。

「主体的な学び」の視点から

「主体的な学び」の視点からは、児童が問題意識をもち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身とのかかわりで捉え、自己の生き方について考える学習とすることや、各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫することが求められる。この

ため、主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話合いや、読み物教材の登場人物の心情理解のみに終始する指導、望ましいと思われることを言わせたり書かせたりすることに終始する指導などに陥らないよう留意することが必要である。例えば、児童の発達の段階などを考慮し、興味や問題意識をもつことができるような身近な社会的課題を取り上げること、問題解決的な学習を通して一人一人が考えたことや感じたことを振り返る活動を取り入れること、我が国や郷土の伝統や文化、先人の業績や生き方に触れることや、自然体験活動など美しいもの・気高いものなどに出合う機会を多様に設定し、そこから感じたことを通じて自己を見つめ、自分自身の生き方について考え、多様な考えをもつ他者を相互に認め合い広い心で異なる意見や立場を尊重し、共によりよく生きようという意欲などを高めるようにすることも重要である。また、年度当初に自分の有様やよりよく生きるための課題を考え、課題や目標を捉える学習を行ったり、学習の過程や成果などの記録を計画的にファイルなどに集積（ポートフォリオ）したりすることなどにより、学習状況を自ら把握し振り返ることができるようにすることなどが考えられる。

「対話的な学び」の視点から

「対話的な学び」の視点からは、児童相互の協働、教員や地域の人との対話、先人の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論することなどを通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすることが求められる。例えば、教材や体験などから考えたこと、感じたことを発表し合ったり、「理解し合い、信頼や友情を育む（友情、信頼）」と「同調圧力に流されない（公正、公平、社会正義）」といった葛藤や衝突が生じる場面について、話合いなどにより異なる考えに接し、多面的・多角的に考え、議論したりするなどの工夫を行うことや、日頃から何でも言い合え、認め合える学級の雰囲気を作ることが重要である。また、資料を通じて先人の考えに触れて道徳的価値の理解を深めたり自己を見つめる学習につなげたりすることができるような教材の開発・活用を行うことや、様々な専門家や保護者、地域住民などに道徳科の授業への参加を得ることなども「対話的な学び」の視点から効果的な方法と考えられる。また、児童同士で話し合う問題解決的な学習を行うにあたっては、そこで何らかの合意を形成することが目的ではなく、そうした学習を通して、道徳的価値について自分のこととして捉え、多面的・多角的に考えることにより、将来、道徳的な選択や判断が求められる問題に対峙した時に、自分にも他者にとってもよりよい選択や判断ができるような資質・能力を育てることにつなげることが重要であることに留意する必要がある。なお、発達の段階や個人の特性などを踏まえれば、教員が介在することにより「対話的な学び」が実現できる場合も考えられ、その実態を踏まえた適切な配慮が求められる。言葉によって伝えるだけでなく、多様な表現を認めることも大切である。

「深い学び」の視点から

「深い学び」の視点からは、道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考える学習を通して、様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習とすることが求められる。そのためには、単に読み物教材の登場人物の心情理解のみで終わったり、単なる生活体験の話合いや、望ましいと分かっていることを言わせたり書かせたりする指導とならないよう留意し、道徳的な問題を自分事として捉え、議論し、探究する過程を重視し、道徳的価値に関わる自分の考え方、感じ方をより深めるための多様な指導方法を工夫することなどが考えられる。深い学びにつながる指導方法としては、例えば以下のような工夫が考えられる。

- ・読み物教材の登場人物への自我関与を中心とした学習において、教材の登場人物の判断と心情を自分とのかかわりにおいて多面的・多角的に考えることを通じ、道徳的価値の理解を深めること。
- ・様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決する学習において、児童生徒の考えの根拠を問う発問や、問題場面を自分にあてはめて考えてみることを促す発問などを通じて、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせること。

- ・道徳的行為に関する体験的な学習において、疑似体験的な活動（役割演技など）を通して、実際の問題場面を、実感を伴って理解することで、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うこと。

道徳的な問題場面には、㊦道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題、㊧道徳的諸価値についての理解が不十分又は誤解していることから生じる問題、㊨道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうでない自分との葛藤から生じる問題、㊩複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題などがあり、これらの問題構造を踏まえた場面設定や学習活動の工夫を行うことも大切である。

③ いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・道徳の授業を通して、いのちの尊さを実感する機会を繰り返しもつようにする。
- ・「生命尊重」「家族愛」「いじめ防止」「人権感覚」

④ みんなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・道徳授業地区公開講座などを通して、多面的多角的な見方や道徳的価値の理解を自分自身とのかかわりの中で深めているかを検証し、意見交換会をすることを通して、みんなの知恵として深めていく。

⑤ 地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・道徳の授業で学習したことが、地域の中で実践できるように考えていく。

(1 1)外国語活動の授業創造プラン

① 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深めること。

- ・活動によって、ALT と担任が連携して模範を行い、学習に見通しをもたせる。
- ・身の回りにあるものを、外国語での言い方を活動の中で使用することから、自然に身の回りにある日常品を外国語で理解を深める場面を設定する。
- ・ALT が挨拶をする中で、児童に調子や天気、日付を聞く場面を設定し、happy や tired、hungry などの調子や sunny や cloudy、rainy などの天気の様子、january や february、first や second など日付表現などに親しませる。

② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

- ・質問しあったり、紹介し合ったりする活動から、周囲との関係性を築き、コミュニケーションを図ろうとする基盤をつくる。

③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

- ・HelloSong や GoodbySong を授業始めと終わりに流し、歌う経験から日常挨拶への習慣付けを行う。
- ・ALT も担任も外国語を主に使用しながら活動中の指示や評価を行い基本的な表現に親しませる。

④ 主体的・対話的で深い学びを実現する。

「**主体的な学び**」について、外国語を学ぶことに興味や関心をもち、どのように社会や世界と関わり、学んだことを生涯にわたって生かそうとするかについて、見通しをもって粘り強く取り組むとともに、自分の意見や考えを発信したり評価したりするために、自らの学習のまとめを振り返り、次の学習につなげることが重要である。このため、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定し、学習の見通しを立てたり振り返ったりする場面を設けるとともに、発達の段階に応じて、身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定することなどが考えられる。

「**対話的な学び**」について、他者を尊重した対話的な学びの中で、社会や世界との関わりを通じて情報や考えなどを伝え合う言語活動の改善・充実を図ることが重要である。このため、言語の果たす役割として他者とのコミュニケーション（対話や議論等）の基盤を形成する観点を資質・能力全体を貫く軸として重

視しつつ、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、他者を尊重しながら対話が図られるような言語活動を行う学習場면을計画的に設けることなどが考えられる。

「深い学び」について、言語の働きや役割に関する理解、外国語の音声、語彙・表現、文法の知識や、それらの知識を五つの領域において実際のコミュニケーションで運用する力を習得し、実際に活用して、情報や自分の考えなどを話したり書いたりする中で、外国語教育における「見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現し、学習内容を深く理解し、学習への動機付け等がされる「深い学び」につながり、資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮されるようにする。このため、授業において、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じた言語活動を効果的に設計することが重要である。

⑤ いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・諸外国の人たちと、主に言語を通して交流することを通して、互いのいのちの尊さとつながりについて実感することができる。
- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人との関わりを深める授業

⑥ みんなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・皆で外国語を使ってコミュニケーションをとることによって、どうしたらより良く親しんだり、言語や文化について学びを深めたりすることができるか考え、実践していく。

⑦ 地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・外国語活動で学んだ、話したり、聞いたりする力を地域の中で活用し、より豊かなコミュニケーションをとれることの楽しさや喜びを味わうことができる。

(12) 特別活動の授業創造プラン

① 指導内容の特質に応じて、教師の適切な指導の下に、児童の自発的、自治的な活動を効果的に展開するとともに、内容相互の関連を図るよう工夫すること。

特別活動は、学級活動、児童会活動、クラブ活動及び学校行事からなり、その上、各内容は、それぞれの特質をもち、多様である。しかも、小学校は、第1学年から第6学年にわたる発達の段階や特性が異なる多学年の集団から成り立っている。このため、特別活動の内容については、学校の実態や児童の発達段階などについて考慮し、内容を精選したり、重点化を図ったりして全体計画、各内容や各学年の年間指導計画を作成する必要がある。

② よりよい生活を築くために集団としての意見をまとめるなどの話し合い活動を充実すること。

話し合い活動は、学級活動の「学級や学校の生活づくり」や、児童会活動の「児童会の計画や運営」、クラブ活動の「クラブの計画や運営」において中心となる活動である。これらの話し合い活動では、生活上の諸問題を話し合いで解決したり、すすんで自分の考えを表現したり、意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して他者の思いや願いなどを理解して集団としての意見をまとめたり、よりよい人間関係を構築しながら生活しようとしたりする資質や態度の育成を図る。

③ 自分たちで決まりをつくって守る活動を充実させること。

児童がつくる決まりは、よりよい学級や学校生活づくりを目指してつくられるものであり、児童の自発的、自治的な活動の範囲内の児童に任すことが適当な決まりである。これらの決まりは、児童の話し合いによってつくられる。このとき教師は、特定の児童が非難されたり、一部の児童に有利な決まりが設定されたりすることがないようにするとともに、集団における自由な意見交換が助長されるよう指導しなければならない。

また、自分たちでつくった決まりを守る活動に取り組ませる場合は、決まりを守ることの大切さや、様々な理由で決まりを守れない状況が生まれる場合もあること、それを温かく認めることも時には必要であることにも気付くことができるようにしていくことが大切である。このような活動を大切にすることは、規範意識を確立したり民主主義における法や決まりの意義を理解したりすることにもつながる。

④人間関係を形成する力を養う活動を充実させること。

児童相互の心理的結び付きは、同じ目的に向かって協力したり達成感を共有したりするときに強くなる。具体的には、学級や学校生活の向上を目指した活動目標や、その目標を達成するための方法や手段を全員で考えたり、役割を分担して実践したり、実践の過程で互いのよさに気付いたりすることによって望ましい人間関係は形成される。このようなことから、教師は、日頃から学習活動や集団活動を通して友達のよさに着目させたり、学級活動の授業として取り上げたりして、それらに積極的に目を向けようとする態度を育成することが大切である。

また、児童会活動やクラブ活動、学校行事などにおけるそれぞれの集団や集団活動の特質に即して、他者とのかかわり方などに関する自己の生き方についての考えを深めたり、自己を生かす能力を養ったりすることが大切である。

⑤主体的・対話的で深い学びを実現する。

「主体的な学び」の視点

特別活動においては、学級や学校の実際の集団生活の中から課題を見い出すことに特質がある。集団生活をよりよくしていくためには何に取り組んだらよいのかということを中心に主体的に見い出したり、活動を振り返り、よい点や改善点を見付け出すことによって、新たな課題の発見、設定をすることが可能となりそれが次なる動機となったりする。こうした課題の設定や振り返りといった学習過程を意識して、そこで育成を目指す資質・能力を明確にすることが求められる。

「対話的な学び」の視点

特別活動は多様な他者との集団活動を基本とし、これまでも「話し合い」を全ての活動の中で重視してきた。集団活動を行う上で合意形成を図ったり、意思決定をしたりする中で、他者の意見に触れ、自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考えたりすることが可能となる。また、異年齢の児童や障害のある児童など、多様な他者と対話しながら協働すること、地域の人との交流の中で考えを広めたり自己肯定感を高めたりすること、自然体験活動を通じて自然と向き合い日頃得られない気付きを得ること、キャリア形成に関する自分自身の意思決定の過程において、他の児童や教員などとの対話を通じて考えを深めることなども重要である。

「深い学び」の視点

特別活動が重視している「実践」を、単に行動の場面と狭く捉えるのではなく、課題の設定から振り返りまでの一連の過程を「実践」と捉え、一連のプロセスの中で、「見方・考え方」を働かせ育成を目指す資質・能力は何なのかということを明確にした上で、意図的・計画的に指導に当たることが求められる。

⑥いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・よりよい学級、学校にしていけるためには、一人一人が大切にされることが必要であることに気付くことができる。
- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人とのかかわりを深める授業

⑦みなに参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・学級会や縦割り班などで、皆で見い出した課題を話し合い、より良い解決をしていく活動を大切

にする。

⑧地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・特別活動で学習した知識や考えを、地域の活動で生かすとともに、地域の中で役立とうとする意欲をもつことができる。

(13)総合的な学習の時間の授業創造プラン

①学習過程を探究的にすること

- ・【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ

総合的な学習の時間にあつては、児童が自ら課題をもち、その意識が連続発展することが欠かせない。しかし、児童が自ら課題をもつことが大切だからといって、教師はじっと待つのではなく、意図的な働きかけをすることが大事である。例えば、人、社会、自然に直接かかわる体験活動においても、学習対象とのかかわり方や出会わせ方などを、工夫する必要がある。その際、事前に児童の発達や興味・関心を適切に把握し、これまでの児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり、対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたりする工夫をしなくてはならない。

課題を設定する場面では、対象に直接触れる体験活動が重要であり、そのことが、その後の息長い探究活動の原動力となる。

- ・【情報の収集】必要な情報を取り出したり収集したりする

課題意識や設定した課題を基に、児童は、観察、実験、見学、調査、探索、追体験などを行う。こうした学習活動によって、児童は課題の解決に必要な情報を収集する。情報を収集する活動は、そのことを児童が自覚的に行う場合と無自覚的に行っている場合がある。目的を明確にして調査したりインタビューしたりするような活動では、自覚的に情報を収集していることになる。一方、体験活動に没頭したり、体験活動を繰り返したりしている時には、無自覚のうちに情報を収集していることが多い。そうした自覚的な場と無自覚的な場とは常に混在している。情報を収集することにおいても、体験活動は重要である。

情報の収集場面では、各教科で身に付けた知識や技能を発揮することで、より多くの情報、より豊かな情報が収集できる。情報の収集に際しては、必要に応じて教師が意図的に資料などを提示することも考えられる。

- ・【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する

学習活動によって収集した情報を整理したり、分析したりして、思考する活動へと高めていく。収集した情報は、それ自体はつながりのない個別なものである。それらを種類ごとに分けるなどして整理したり、細分化して因果関係を導き出したりして分析する。それが思考することであり、そうした学習活動を位置付けることが大切である。このような学習活動を通して、児童は収集した情報を比較したり、分類したり、関連付けたりして情報内の整理を行う。このことこそ、情報を活用した活発な思考の場であり、こうした学習活動を適切に位置付けることが重要である。

- ・【まとめ・表現】気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

情報の整理・分析を行った後、それを他者に伝えたり、自分自身の考えとしてまとめたりする学習活動を行う。そえることで、それぞれの児童の既存の経験や知識と、学習活動により整理・分析された情報とがつながり、一人一人の児童の考えが明らかになったり、課題がより一層鮮明になったり、新たな課題が生まれたりしてくる。このことが学習として質的に高まっていくことであり、表面的ではない深まりのある探究活動を実現することにつながる。

⑥ 他者と協同して取り組む学習活動にすること

- ・多様な情報を活用して協同的に学ぶ

体験活動では、それぞれの児童が様々な体験を行い、多様な情報を手に入れる。それらを出し合い、情報交換しながら学級全体で考えたり話し合ったりして、課題が明確になっていく場面が考えられる。

学級という集団での協同的な学習を有効に機能させ、多様な情報を適切に活用することで、探究的な学習へと高めることが可能となる。

・異なる視点から考え協同的に学ぶ

物事の決断や判断を迫られるような話し合いや意見交換会を行うことは、収集した情報を比較したり、分類したり、関連付けたりして考えることにつながる。そのような場面では、異なる視点からの意見交換が行われることで、互いの考えは深まる。異なる視点を出し合い、検討していくことで、事象に対する見方や考え方が深まり、学習活動をさらに探究的な学習へと高めていくことが考えられる。

・力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ

グループや集団で学習活動を進めることや、地域の人や専門家など校外の人と交流する機会を設けることも有効である。一人ではできないことも集団で実現できることは多い。また、地域の大人などとの交流は、児童の社会参画の意識を目覚めさせる。

協同的に取り組む学習活動においては、「なぜその課題を追究しているのか(目的)」「これを追究して何を明らかにしようとしているのか(内容)」「どのような方法で追究すべきなのか(方法)」などの点が繰り返し問われることになる。このことは、児童が自らの学習活動を振り返り、その価値を確認することにもつながる。協同して学習活動に取り組むことが、児童の問題の解決や探究活動を持続させ繰り返させるとともに、一人一人の児童の考えを深め、自らの学習に対する自信と自らの考えに対する確信をもたせることにもつながる。学級集団や学年集団を生かすことで、個の学習と集団の学習が互いに響き合うことに十分配慮する。

⑦ 主体的・対話的で深い学びを実現する。

【主体的な学び】 探究のプロセスの中で主体的に学んでいく上では、課題設定と振り返りが重要である。課題の設定にあたっては、自分事として課題を設定し、主体的な学びを進めていくようにするため、実社会や実生活の問題を取り上げることや、学習活動の見通しを明らかにし、ゴールとそこに至るまでの道筋を描きやすくなるような学習活動の設定を行うことが必要である。

振り返りについては、自らの学びを意味付けたり価値付けたりして自己変容を自覚し、次の学びへと向かう「学びに向かう力」を培うために、言語によりまとめたり表現したりする学習活動を意識することが必要である。

振り返りは授業や単元の終末に行うものとは限らず、学習の途中において、見通したことを確かめ、必要に応じて見通しを立て直すことも考えられ、こうした振り返りを主体的に行う資質・能力を育てることも重要である。

【対話的な学び】 多様な他者と力を合わせて問題の解決や探究活動に取り組むことには、⑦他者へ説明することにより生きて働く知識や技能の習得が図られること、④他者から多様な情報が収集できること、⑤新たな知を創造する場を構築できることといったよさがある。例えば、情報を可視化し操作化する思考ツールの活用などにより、児童相互で学び合うことを助けるなどの授業改善の工夫によって、思考を広げ深め、新たな知を創造する児童の姿が生まれるものと考えられる。協働的に学習することはグループとして結果を出すことが目的ではなく、一人一人がどのような資質・能力を身に付けるかということが重要であることに留意する。

また、「対話的な学び」は、学校内において他の児童と活動を共にするということだけではなく、一人でじっくりと自己の中で対話すること、先人の考えなどと文献で対話すること、離れた場所をＩＣＴ機器などでつないで対話することなどを含め、様々な対話の姿や対象が考えられる。

【深い学び】 探究のプロセスを一層重視し、これまで以上に学習過程の質的向上を目指すことが求められる。実社会・実生活に即した学習課題について探究的に学ぶ中で、各教科などの特質に応じた「見方・

考え方」を総合的に働かせることで、個別の知識や技能は関連付けられて概念化し、能力は実際の活用場面と結び付いて汎用的になり、多様な文脈で使えるものとなることが期待できる。

特に、「㊦課題の設定」の場面で課題を自分事として捉えること、「㊧整理・分析」の場面で俯瞰して捉え内省的に考えるという「探究的な（探究の）見方・考え方」を働かせることが重要である。

⑧ いのちを感じ、いのちを伝え合い、生きる喜びあふれる明日をつくっていく。

- ・「いのちの大切さ」を基本とする学習
- ・体験学習の重視
- ・人とのかかわりを深める授業・
- ・3年生「かいこを育てよう」、「なかだの自然と友達」
- ・4年生「二分の一成人式を成功させよう」
- ・5年生「自分の将来を見つめる」

⑥みなが参加し、ともに知恵を出し合い、新たな創造をしていく。

- ・各教科で身に付けた力を結集し、皆で話し合う活動を通して、より良い知識や考えを見い出していく。

⑦地域の中で感じ、考え、行動する、地域がステージの学びをしていく。

- ・総合的な学習を通して身に付けた力を地域の活動の中で生かし、地域の中で役立とうとする意欲をもち、実践していくことができる。

(14)UD化の環境・授業づくり

①全ての児童に分かりやすい授業を目指して、授業のUD化を図る。

- ・場の構造化 …… 整理整頓された、分かりやすい環境をつくる。
- ・時間の構造化 …… 授業全体の見通しや時間配分が分かるようにする。
- ・刺激量の調整 …… 教室の前面・黒板には掲示物を貼らない。授業に必要な情報だけを掲示する。
- ・ルールの明確化 …… 学校全体のルールを明確にし、全校で徹底する。
- ・相互理解の工夫 …… 学習の場面で、助け合って課題を解決したり、個々が活躍したりする場면을意図的に取り入れる。
- ・焦点化 …… 授業における学習内容の本質を見極め、ねらいを明確にして、学ぶべき事柄を一点に集中し、授業をシンプルにする。
- ・展開の構造化 …… 何からどのように体験させるか、説明するか、焦点化した内容を伝えるのに最適な展開を精査し、根拠をもって決定する。
- ・スモールステップ化…課題へのアプローチに個に応じた細やかなステップを設ける。
- ・視覚化 …… 抽象的なものや見えないものを「見える化」し、児童にイメージをもたせる。
- ・感覚の活用 …… 身体を通しての理解(感覚)を授業の中に取り入れる。
- ・共有化 …… 「共同化」や「学び合い」を取り入れ、互いの考えを伝え合ったり確認したりする活動を大切にし、友達の考え方を自分の意見のモデルや下敷きにして、自分の考えを深める。
- ・スパイラル化 …… 一度学んだことを「繰り返す」視点を授業に取り入れる。

②命の大切さを実感しながら理解することができる取組(各教科)

国語 1年「動物の赤ちゃん」

動物の赤ちゃんを比較することによって、生き物の命の力強さについて考える。

国語 2年「スーホーの白い馬」

登場人物の気持ちや情景を考えるを通して、生き物の命について考える。

国語 3年「ちいちゃんのかげおくり」

登場人物の気持ちや情景を考えるを通して、命の大切さについて考える。

国語 4年「ひとつの花」

登場人物の気持ちや情景を考えるを通して、命の大切さについて考える。

国語 4年「ごんぎつね」

登場人物の気持ちや情景を考えるを通して、命の大切さについて考える。

社会 4年「消防の仕事と人々の協力」

消防の仕事を通して、安全や命の大切さを知る。

社会 4年「けいさつの仕事と人々の協力」

けいさつの仕事を通して、安全や命大切さを知る。

理科 3年「こん虫を育てよう」

昆虫を観察したり、体のつくりを調べたりすることを通して、生き物の命について考える。

理科 3年「植物をそだてよう」

植物の実や種子のでき方から、生命のつながりを知る。

理科 5年「人のたんじょう」

人の生命の誕生と母体内での胎児の成長の素晴らしさについて考える。

理科 6年「生命と地球環境」

『食物連鎖』について学習させ、全ての生き物は生き物同士のつながりの中で生きていることを知る。